

第4回 富士市教育振興基本計画策定委員会 議事概要

日時 令和3年5月11日（火） 午後6時30分～午後8時25分

場所 富士市教育プラザ 1階大会議室

出席者

[策定委員]

田辺 敬子 佐野 弘美 渡井 裕將 来住 紗依 武井 敦史

那珂 元 田中 尚志 檜木 小重美 大石 久美子

会議の概要

委嘱状・辞令書交付

森田嘉幸教育長より委嘱状・辞令書を交付する。

議 事

事務局より富士市教育振興基本計画の施策の体系について資料1を用いて前回からの変更点を説明する。

(1) 施策の体系について

委員長	事務局より施策の体系の説明をいただきました。前回の策定委員会の意見を思い出されたと思いますが、ご意見等ございましたらお願いします。
A委員	1-2の「誰一人取り残さない社会を目指した教育の充実」を新設は良かったです。そのうちの②③④について、誰一人残さない、学校の教育の中で特別支援が必要なお子さん、外国人のお子さん、学校にいけないお子さんをはじめとした支援が必要なお子さんたちの施策ということで当てはまると思います。また、経済的に困窮しているお子さんも対象に入るかと思いますが、それは福祉の方が担当かと思ひ、わかりません。①のSDGsがここに動いていま

	<p>すが、SDGs 中のジェンダーの項目のことを考えるとここに入るかと思いますが、SDGs は 1-1 の方に当てはまると思います。そのため、1-2 にした理由をお聞きしたいと思います。</p>
事務局	<p>SDGs は 17 の目標を掲げ、新たな時代に対応することであり、その視点で考えると 1-1 に含まれます。しかし、最終的に誰も取り残さない社会を作ることが SDGs の目標・目的になります。そのため、施策の柱として「誰一人取り残さない社会を目指した教育」を用いたため、SDGs をここに含むことにしました。A 委員のおっしゃる通り、新しい考え方のひとつであり 1-1 に入ってもよろしいと思います。しかし、最終的な目標の意味合いを踏まえると、1-2 がふさわしいと考えます。</p>
A 委員	<p>お任せします。</p>
B 委員	<p>誰一人取り残さない社会の中で、福祉という言葉も出てきたが、最近、ヤングケアラーという言葉が出てきています。この中に位置づけられないかもしれないが、考慮していただくとありがたいと思います。施策の体系を見て印象的だったのは、前回までは課ごとに区分けをされていたが、今回はいろいろなところが力を合わせて行っていくような標記になっていました。連携や打ち合わせが大変と思いますが、総がかりでやっていくという印象を受けました。</p>
副委員長	<p>1-2 の「誰一人取り残さない社会を目指した教育の充実」を体系に取り込んだところが、新しい、時代に合った施策だと思います。③の「外国人等の児童生徒への支援」ということでいろいろな部署との連携等の話がありましたが、富士市でも多文化共生の宣言をしているので、男女参画共同課と連携することでより具体的な施策が出てくると思います。SDGs が違和感がある場合は、多文化共生や共生社会という言葉に変えると、誰一人取り残さない社会とニュアンスがあってくると思います。</p>
事務局	<p>この場で変えることはできないが、外国人等の児童生徒への支援の取組の中身は言葉自体が表しています。富士市は多文化共生を進めていますし、男女共同多文化参画もあります。教育委員会として、この取り組みの一端を担っているため、この後検討し、回答したいと思います。</p>
委員長	<p>今まで出てきた問題も含め、振興基本計画が進んでいく段階では今までなかったような問題や意見が浮上することや、書き方が偏っているのではということが出てくるとは思います。今、重要なのは大枠がずれていると修正が</p>

	<p>難しくなるので、大枠が大切になります。体系の一番の基本は基盤整備と学校と社会教育ですが、ここは大きくは揺らがないだろうと考えられます。学校は今までの在り方と近いので安定しています。社会教育も今までの事業の中から出てきていますが、これで十分ということはないし、これからいろいろなものが必要になってくると思いますが、まとまりはいいと思います。基盤については、前回と比較し 1-1 から 1-3 についてはバランスがいいと思います。その後の文言をどうするかについては、B委員が言っているように様々な課の連携になっているので、連携強化と見直しの際に、この施策でいいのか検討することができるので、ここでは完璧な解を求めるのではなく、暫定解としてこの議論を進めていくスタンスであればいいと思います。皆さんよろしいでしょうか。</p> <p>(委員は皆頷く)</p> <p>では、文言は各論を見てからでも修正は間に合うので、暫定解としておき次に進めましょう。</p> <p>続いて、教育振興基本計画各論です。各論と総論というのは作りが違って、体系は富士市の目標から降りてきて演繹的に作られている傾向が強く、各論は事業との絡みが強く、どのような事業があり、どのように評価するのか、下から帰納的に上がってくるという傾向が高いです。当然この 2 つが合致することが望ましいのではあるが、そう簡単には合致しません。目標の立て方や評価の仕方、それに対して年度ごとどうやって追跡していくか、が入ってくると思われます。</p>
事務局	(各論について説明)
委員長	<p>学校関係者は慣れていると思いますが、それ以外の方はこうしたものを目にする機会が少ないと思われるので、今の説明を受けて、率直に疑問点等、ご意見があれば言ってください。各論についてはこれからやります。それぞれ方針があり、代表的な取り組みとそれ以外の取り組みを列挙し、代表的な取り組みについて目安としての目標を数値化して出すという作りについていかがでしょうか。各論を見ていけばこうしたほうがいいというものも出てくると思います。</p>
C委員	<p>あまり見慣れないので、どこに注目すればいいのかがわかりません。流れはわかりやすく、こうしていきたいという目標があり、そのための施策や結果どうするかがあり、流れは見ていて、変だとは思いませんでした。今後の</p>

	<p>方向性に4つの黒丸があるのに対して、必ずしも黒丸の数と施策の数が一致していないところがあり、どこに反映しているのかわかったほうがいいのか、わからなくてもいいのかと思いました。</p>
委員長	<p>今後の方向性を見ていくときに、この施策の柱の中にあるものだけで充分かどうかということも含めて、いろいろな考えが出てきます。今後の方向性の施策はこの枠でこの数しか出てこないというとその枠が前提になってしまいます。一方で、理念からするとこの施策の枠自体が暫定解であるので、それで本当に良かったかを考える必要があります、そこにはギャップが存在します。いわゆる妥協の産物の中で進んでいる前提で考え議論したほうが現実的だと思います。</p>
事務局	<p>絶対的な解はないと思っています。今後の方向性の中に大きな枠でいいから、漏らしているものがないことが大切と考えます。新たな時代に対応する取組の推進の中でいうと今後の方向性の言葉の中で、これから進めていく取組のキーワード的なものが、基本はすべて含まれているようにしていかないといけないと思います。施策の数ごとに今後の方向性が一つずつわかるようにしてしまうとどうしても言葉が足りず、言っていることが少しずつになってしまい数が対応しなくなっています。</p>
委員長	<p>各論に入ってから戻ってくるのもあっていいと思いますので、先に各論を見ていきその中で考えてくようにしたいと思います。進め方として戻ることにはあるが施策の順序に従って施策の柱ごとに議論を進めていきます。今回と次回の会議で最後まで進めます。作り自体に問題があった場合、その重点を置き議論し、次回までに読んできていただき、次回はスピーディに進めるということも、その逆ということでもいいということです。時間の範囲内でできるだけ論点を多く出しておいて、次回までに考えてきていただいて、次回最後まで検討していくようにしたいと思います。</p> <p>施策1について事務局からお願いします。</p>
事務局	<p>(施策1について説明)</p>
D委員	<p>施策1は核となる内容で素晴らしいと思います。指標に関しての質問ですが、バリアフリートイレ等は客観的な数字になるけれども、この3つはアンケートの回答ということになります。古いほうを見るともう少し具体的な、数値化できるような指標を選ばれているのですが、あえてアンケートにした理由を知りたいです。特に1番だと辛口の評価の教員は評価を低くしがちに</p>

	<p>なると考えられるので数値がぶれるのではないかと思うがいかがでしょうか。</p>
委員長	<p>主観の問題もあるし、Society5.0 がどういうものなのか輪郭がはっきりとしていない概念です。そうだとすると令和8年度という長期のスパンで8年度に85%しか教員が使えなければ時代に対応しきれないのではないかと思います。あと2年くらいで95%くらいまで到達し、その後新たな目標を立てるくらいのスピード感が必要だと考えます。輪郭がはっきりしていないゴールに対する対応の在り方が一つです。施策2と施策3を比べると、どちらも100%になっています。施策2の方はアンケート調査で100%ですが、連携推進委員の中に一人でも批判的な方がいた場合に、市全体の目標が未達になるということです。果たしてそのような目標の立て方が望ましいのかどうかです。以降の指標にもこのようなものが多く出てくると思うので、はたして目標を形式的に一律に定めることがよいのか、それとも自主的なところを取っていくのがよいのか、というところがあります。目標を定めるということは市の教育行政をわかりやすく市民に努力の状況を伝えていく役割もあります。そのためには数値が出ているほうが一番わかりやすいです。そのバランスをどうとるかという問題を一方においてある中で、このようなことが出てきたと思われま。このような所々の問題に対して、事務局としてはこういう態勢で、こういう考え方でこのような原案を持ってきたということがわかるとこの後の議論が進めやすくなります。</p>
事務局	<p>アンケートが多く含まれる理由は、予算次第で達成するかが決まるものがあり、現教育振興基本計画にもいくつか含まれていたもので、そうなるのを避けたいためです。また調査については全国的に実施しているものも、富士市独自のものもありますが、基本的には新規の調査、数字の管理を実施しないで済むようにしたいためでもあります。現状、様々な形で我々が把握している、今後も把握していく、使っていける調査があるので、その中からそれぞれの施策をあらわせるものがないかと考えました。そのため、アンケートや今実施している調査の中から指標を置いているものが多くなっています。目標値が、GIGA スクール、Society5.0 の ICT 活用指導力、「できる」「よくできる」と回答した教員の割合のところ、算出方法が「学校における教育の情報化の実態等に関する調査」となっていますが、教員ごとに行っている調査です。100%という指摘がごもっともというところでもあると思いますが、指</p>

	<p>導力の状況により、「できる」「よくできる」ということになりますので、現状は 85.0 とおいてあります。矛盾するかもしれないが、②と③で 100%に設定しています。他にも 100%に設定している指標はあります。委員長がおっしゃるように、教育委員会が 100%を求めているから、どういう意図なのかといういろいろなことを考えながら学校が回答してくることもあるかもしれません。指標の中に書いてある、例えば「小中を一貫した教育活動が、子どものよりよい学びと生活につながっていると感じる連携推進員の割合」では、教育委員会が進めている小中一貫教育に関しては、連携推進委員はもちろん、すべての教職員に対して、小中一貫教育というものが子どものよりよい学びにつながっていることを理解していただきたい。全員に理解し、納得してもらい進めていってもらいたいという理想の部分も含まれています。その理想が最終的には、100%は難しいにしろ、現実的に 99.8 や 95%とか、しかたないではなく前向きに 100%を目標にやっていきたいという意思の表れと理解していただきたいです。</p>
委員長	<p>矛盾を承知して進めていくのはいいと思うが、例えば、代案としては目標を令和 8 年度に置くのではなく令和 5 年度くらいにおき、その時点で 95%、その後の目標はそのあとに立てる、でもいいのではないのでしょうか。100%になるまでずっとやっていっても生産的ではないと思います。交通事故 0 と同じで標語としてはいいかもしれないが、本当に 0 になって事故が起きた時の対応をやめてしまっは大変なことになるので、理想として掲げるところと実際に現実的な着地点はどこかという思考は別に持つておかなければならいでしょう。振興基本計画ではどちらを求めるかであって、理想だけ語っていいのであれば、それこそすべて 100%をいくら多用していただいてもかまいません。その一方で、理想を掲げていると PDCA が働かなくなることもあります。理想が常に不可能な理想しか立てていなければ、どこを改善すれば 100%になるかはわからないし、100%にしようがないです。現実の改善を取るのか、理想を取るのか、その論点が難しいところです。その中で、委員のみなさんの総意で、こういう方向で考えるというものが、その考えはどちらの考えであってもいいと思っています。あくまでも 8 年度までの目標であるから 8 年度に向けて立てるのが筋だ、100%を目指すから 100%でいい、それが未達であること、A 評価がつかないことがわかっているがそれでいいという考え方で事務局の案が出てきているが、それでいいというのであればそれ</p>

	<p>でいいと思います。そのジレンマは永遠に解けないところだと思います。これが県であれば、総合計画と教育振興基本計画を同じ書き方をしてくれと強い意向があって、そのように数値を並べなければならないということがあるが、市の方はそこまで制約は厳しくないというのであれば書き方はいろいろであり、裁量は我々の中にあると考えてもいいと思います。ものの性質によって書き方を変えるということがあり、そこに対する疑問があればそこから対話が膨らむということがありますので、そこを含めて議論ができればと思うのですがいかがでしょうか。ここでの議論は評価するときに生きてくると思いますから。</p>
B委員	<p>資料を読んだときに100%は無理だと正直思いました。アンケートで100%はありえないと思いました。そこを目指していくといわれると、そうかなという気もしますが、行政的には100%と書くのは多いですか。</p>
事務局	<p>多くはないです。それぞれです。</p>
B委員	<p>読みながら100%と書かないと行政的なものとしてはやる気がないと取られてしまうのではないかと感じていました。他の部分、現状の課題や方向性のところは箇条書きになっていて、焦点化されていてわかりやすかったです。難しい文言が多いので、かなり脚注をつけてあげないと読めないだろうと思いました。前回のものには脚注がついていますが、そうするとレイアウトとかが難しくなってくるかと思います。教育関係者だけではなくて、いろいろな方が読む、目にすることを考えると、丁寧に作る必要があると考えました。</p>
A委員	<p>算出方法についてはこれまでの既存のアンケートなどを駆使して、工夫されているのがわかりますが、指標とは課題がどのように解決されてきたかが見えるのが指標であると考え、現状と課題が重要になると思います。「幼児教育を含め、学びの連続性を意識した教育の推進が急務となっています。」と書いてありますが、これは課題ではないと考えます。なぜ、学びの連続性を意識した教育、幼小中高の一貫した学びの連続性が必要かが課題であると考えます。その課題の部分をもう少しはっきりしたほうがいいと思います。地域とともにある学校づくりが今まで以上に重要だということですが、なぜ重要なかが課題だと思います。その課題がどのように解決されていったかが見えるのが指標と思うので、それに適合するものがあればいいのかと思いました。SDGsについて、幼児教育を含め、学びの連続性が新たな時代というのに違和感があり、今までも幼小中の連続性はずっと重要だといわれて</p>

	<p>きているのでなぜ新たな時代なのかと思っています。なぜ学びの連続性が重要なのかということ考えたときに、最初に小学校から中学校への、中1ギャップであって、誰一人取り残さないということを考えると施策の柱2であるほうがいいのではと思います。学びの連続性とSDGsは逆のほうがいいと思っているので、課題からもう一度掘り起こして考えていただけるとよろしいかなと思います。施策1の指標についての85%は低すぎると思います。</p>
E委員	<p>このページを見たときに、幼児教育を方針の中に組み込んでいただき、とても嬉しかったです。人格形成の基礎を培うのが幼児教育の使命ですので、そこから始まるというのが表れていました。内容に関しては、委員の方々の話を聞いていると、そうだなあと思うのですが、私は素直にここに謳ってくださっていることがうれしく思います。特に施策2の「学びの連続性を意識した教育の推進」は幼児教育で種をまき、小学校の生活科、総合科の学習につなげるようにしています。中学、高校と長いスパンで考えて取り組んでいますので、幼児教育を知っていれば、「学びの連続性を意識した教育の推進」の大切さは感じます。指標の中に小中一貫というのが謳ってあります。富士市は小中一貫を推し進めているのがわかるものだから、そうだなあと思います。その他の取組にちゃんと園小連携によるアプローチカリキュラム・スタートカリキュラムの言葉が入っており、具体的であり、小学校との連携を考えてくれているところがありがたく思いました。幼児教育もSDGsを推進しています。その辺も絡めながら読ませていただきました。</p>
委員長	<p>議論をすれば、時間があるだけ議論ができることなので、今日の段階では課題を投げておいて、次回までにそう聞けばやはり変えようと思うか、思わないか、思わないのであればそれは市教委の意向で今まで苦労してやってきたうえでそう思うということで、それはそれで重要視することはあっていいと思います。いわれてみるとまずいなということについては変更しておいていただき、それを次回もう少し揉むという形でリファインできると思うので、今日は課題を出すようにしていきましょう。</p>
F委員	<p>説明していただくとわかりますけれど、違う方向に進むと困るのでなるべくわかりやすい、優しい言葉で書いていただいたほうが一般の人はわかりやすいと思います。コミュニティスクールなど、具体的にどのようなことをしているのかを書いていただいたほうが、子どもがいる人はわかるかもしれないが、子どもがいない人はいったい何をしているのだろうと思います。市の</p>

	<p>は重要なのでやってみていいということ、代表的な取り組みというものは、代表というのの一つでなければならないということはないはずです。例えば学びの連続性であれば、幼小の値と、小中一貫の数、両方とっていくこともやってみていいことであり、どちらかが100%に近づいて行ったなら、それを落として割合が低い方に重点化して、強化していくことがあってもいいのではないのでしょうか。検討の材料としては、数値に作用されなくします。必要な作用のされ方はあるものの、必要以上に数値に左右されなくなるという方向と、理想を示すものであれば理想を示す、実際の達成目標であれば実際の達成目標であることが、ある程度分かるように、わかりやすく書けるかどうか大切です。評価が大変になるが、指標を代表的なものを複数にすれば一つ一つの重みが、絶対性が揺らぎますので、そうすることもやってみていいとおもいます。目標年度をどうしても令和8年度にしなければならないか、それより前を見て、それ以降再設定することが可能であるかどうか、事務局でもう一度検討してみてもいいと思います。5年間やるということだからそれなりに議論をする価値のあることと思うし、年度の総括をする際に、教育委員会の中での議論も変わってくるだろうし、そういう意味ではここで議論しておくことは無駄ではないかと思います。</p>
副委員長	<p>皆さんのお話を伺い、付け加えることはあまりないのですが、全体的に見てみると現状値がなく、目標値があるものについては、アンケートであることが多いと感じました。こうなりたい、こうしたいという理想の部分だと思うので「～を目指します」という書き方にしてもいいのかなと思います。気になったのは代表的な取り組みを一つ上げていて、その指標の現状値、目標値が書かれていますが、これが必ずしも現状の課題、今後の方向性とリンクしていない点です。例えば施策の柱1であげられている「幼児教育を含め、学びの連続性を意識した教育の推進が急務となっている」ところではなぜ急務になっているかが課題だとしたら、その課題をどのように改善したのかが目標値、指標になります。課題と方向性はこうで、具体的な取り組みはこうで、指標はこうだと、リンクを取っていないと、振り返りができなくなってしまいます。リンクしていないので、最終的に自己評価をするときにそれぞれの取組の自己評価になってしまうだけで、そこで完結してしまいます。また、図書館の部分も同じで、施策①「生涯にわたる読書習慣の推進」の文言がどうであっても図書館の指標は図書館の貸し出し冊数であり、図書館はそ</p>

	<p>こで評価されます。毎年増えていけば図書館はちゃんと市民に利用されていると評価できるし、一人当たりの貸し出し冊数が減れば蔵書を見直したり、開拓したりする必要が出てきます。これは単純に図書館の取り組みであって、全体の「市民の学びの場である図書館の充実」とは、あまり結びつきません。それこそ「新しい時代の」といったときに、新しい課題に対応する施策が必要であって、それに対応する指標が必要なのかと思います。連続していないとダメではないかと思います。だとしたら、現状と課題、今後の方向性、ここはおそらく背景であって、目指す目標はこの中の今後の方向性に入れても課題はもっと具体的な課題を一つか二つは載せるべきであって、あれもこれもとたくさん課題のところに設定してしまうと振り返りをしたときに課題に対してどう改善したのかが数値としてみることができなくなってしまい、後付けの現状の調査の結果を無理やりつけて、数値が上がっているから課題が達成しましたとなると、もともとの調査の目的と今回の教育基本計画と新たな時代のといったところの課題設定とリンクしていないので、ちぐはぐになってしまい検証ができないのではないかと心配しております。一貫性が大事で、目標を大きく掲げていいと思いますが、5年間あれもこれもとできないので、具体的な課題を絞ってそれに対する目標を数値で表す必要があれば、逆に言えば数値で表せる課題を設定しなおしたほうがいいのではないかと思います。代表的な取り組みではなく具体的な課題を挙げたほうが説明や評価がしやすくなると思いました。</p>
<p>委員長</p>	<p>副委員長の発言を別の言い方でいうと、推移がわかるような取り組みを指標に用いたらいいのではないかと、ということだと思います。人格の完成のように理想はあるけれどもその理想はいつまでやってもどこまでやってもわからないものではなくて、推移が顕著に表れるものを代表的なものとして取り上げていく、ということを検討してみてください。</p>
<p>副委員長</p>	<p>逆に言うと、基本計画も“0”からいきなりスタートしているわけではないので、昨年までの積み上げがあるので、昨年までで課題となったものの中で特に数値が毎年とれている、推移がはっきりしているもののうち、昨年度までで課題であると指摘されたものを課題に設定すればいいのかと思います。新たに追加したものについては、昨年度末数値がないので、「今後目指します」程度に収めておくべきかと思います。</p>
<p>委員長</p>	<p>今回の結果を受けて、事務局から再度資料を提出してもらい、次回で施策</p>

	<p>のところまで一通り進みたいと考えています。富士市は、安定してきちんと施策をやってきている教育委員会でありますので、私たちも信頼していいと思いますし、今日の議論を踏まえて、変えるところは見直していただき、変えなかったら変えなくていいと思います。次回は、今回の議論を踏まえて、理想であり 100%を掲げておくことに意味があるとする場合に理由を明確にしておいていただきたいし、具体的な推移を見ておいたほうがいいという場合も理由を明確にしておいていただきたいと思います。目標値を文言に変えるのもよろしいですし、目標の年度を令和8年度ではなく、手前に設定し、その時に再度設定するというのもあります。課題の書き方も「～します」という書き方と現状の課題があるわけですが、もう少し具体的に言葉を足すということもあっていいと思います。また、わかりやすさの問題がありますが、限界はありますが、注を足すことと、学校運営協議会とコミュニティスクールの両方の言葉が使われていたとして、そういうのを合わせて一つの言葉を使っていくというような工夫を加えていただいて、皆さんに読んでいただければ、ここが問題だというように事務局からの説明の時間を長くとらずに済むかと思えます。今日、議論するところはかなり議論したと思いますので、次回の議論では、より焦点化して、ここをこうしたら、や、この数値を上げたら、下げたらいいのではなか、や、この言葉がどうしてもわからない、というような各論の修正に時間をかけられると思います。このようなやりかたでやれば、今日一番基本的な議論はかなり詰めることができたと思いますので、厳しいのはわかっていますが、次回1回で終われるのではないかと思います。一つ一つを議論していけば今回、次回の会議でも無理だったと思います。このような進め方で委員の皆さん、事務局の皆さんいかがでしょうか。難しいというのであれば、事務局と相談して別の進め方を考えてもいいと思います。</p>
事務局	<p>指摘していただいた形でのやり方として、事前に今回配布させていただいた資料の修正点をわかるようにして、2週間前を目途に委員の皆さんに郵送させていただきます。資料に目を通していただき、わからないところや目標値についての検討を進められればと思います。次回は7月に予定しています。予定では次回に決定と考えていますが、必要であれば8月に開催することも考えています。前提として今回ご指摘いただいた指標等の直していかなければならないところを事務局の方で次の会議の前までに修正し配布することが</p>

	できればと考えています。
委員長	事務局には大変な負担になってしまうことは大変心苦しいので、後ろ倒しにできないことはないと思います。資料の作り方として、事務局はファイルを共有化してWordを用いて作っていますか。そうであれば校正履歴を残していただき校正履歴ごと印刷いただければ何をどのように変えたかがはっきりわかるかと思います。そのような形で委員の皆様を送っていただければ、何をどう変えたかよくわかりますし、コメントも載せることができますので、それを両方見比べて説明するよりは大変ではなくなると思います。そのような形でやればだいぶ効率的になると思います。今後の作業としては、今日の議論を踏まえて各担当課に戻して、もう一度検討していただき、このままいくか、修正するか、そしてその理由を添える作業を、Wordのコメントと校正履歴を残してずっとできると思います。印刷が手間かもしれませんが、履歴を残したものと最終的にこうなったというものをいただければ我々はよくわかります。このようなやり方を検討いただけますか。
事務局	おっしゃっていただいた形で、わかりやすい形で作りしたいと思います。
委員長	そのあと、8月を含め2回の会議でパブリックコメントにかける段階までもっていきます。パブリックコメントで我々の気づいていないところも指摘いただけますので、そうしたら謙虚に受け止め修正すればいいことですので、8月までにパブリックコメントの前の段階まで行ければと思います。

次回の日程等について

事務局より、今後の会議日程について説明する。次回は、7月7日（水）教育プラザ1階大会議室にて開催予定。

閉 会